あ川め子

下

伊地知文庫
文庫20
119
2

文庫20
119
2

伊地知氏書冊

元旦

伊地知氏書冊

元旦

今緑川皆花をと心の今朝の春

天地の花やまさりの人さかき

春またぬ霞立つや萬世門乃松

世緑なる心や花の春の宿

春の川以てハもかすみ緑ぶ

外つりや咲まちかねし日の元

今日咲千代の初春宿の梅

君や治る海安の国民乃春

日の出数民見千さやに錦の春

緑立や千代のはしめ代さの春

[印]

孫出るに新玉の春日可南

立年の色も常盤木松の春

雪消れ去年の名立て花の宿

来るとしの色添けり千代の宿

報恩祈念

麓より山よりくるや花乃春

東風吹よ山の雪解も春の春

天地の開けてより世々の恵

花盛り讃や門の雛飾り

世の恵の時まゐりけり千鶴の春

今より世旬ハ高繁の恵

松鶴の年波幾世恵の春

山の緑春あ作し玉の春

ゆづり葉も咲や羽乃色の春

子もちしの春

山の端も雪作りし玉の春

りつるとへ咲や羽乃もの春
十としの春

鶯の音のとし経ぬや初きく春
七十の老迎へつゝ

若緑とやすしもろちゑの春

若水や花をとやほふりし春
七十二

咲や笑八重九重の花の春
七十三

七十をよみ川く三のはしめかな

としやみゝもあんくり宿の春
三とし の春

百の恵とし の春ありかたき哉

七十五

七十もまたや万葉の松の春

七十六

七種も済むや六十路の花の風

若の中も見て孫へハ花や忘の水

よろしかる

七十七

七十や済む七種の花の春

七十八

七十に寿やえ流ハ八重霞

御代治りの四十年

往昔花月ある世の今の猿も

七十九

年波や八十瀬まとまる花の春

平供會始 初甲子

子日寿ぐ松ハ言葉のはしめかな

意勝れし

從芳礼あるへのみ……

七十九

年波や八千瀬まくもよき色の春

平佐會始　初甲子

子日とて松ハ言葉のはしめ哉

意勝むかし

言種のあり数々摘む若菜かな

法楽

松や知る来いく千々の神の春

松風や香を添へ来る神の梅

緑なれや色香の外の神の霞

さく梅や神の衣の春霞

梅白し拂はぬ雪の羽清め

咲梅の八重垣川や宮居の秋

松かけぬ梅や一夜の花の色

神の香に深みや恵み神の梅

梅の香りゆかりや庭の初清め

[illegible]

梅の盛りや神の二柱

咲や今神の宮に花の兄

梅ありと風のしらせか手植にて

薫さへ雪より梅の香深し紀長者

花盛り松一入のよきみどり

名に香る神代もかくや庭の梅

九百年の御神忌二月廿五日於
某町天満宮より[illegible]奉

頼の真世やとこしへ神の梅

春や先立梅に咲き神の梅

春久し咲や常盤の神の梅

春色をもすん陰[illegible]世神の松

安らのふよし補

春久し咲や常盤木神の梅
青き色をかへぬ陰萬世神の松
安しのふよし補

神の香も深めや恵ミ神の梅
梅の香りゆかしや庭の錦清め
松ハ色よ千代や神ハ居ル宿の春
志ら綿々錦もや白ふ神の梅
梅の香や四方も満ぬ神の恵
春の世ハ松も陰あり神の梅
拂ハな神の恵ミゆかし雪の梅
梅咲きて皆　君の代ハ垣の松
錦着も世に　梅よりさき神の春
松風や見しをさ千寸神の宿
松梅や千代の陰よし神の庭
陰萬世　竜ハ八重さし　神の梅

梅白く柳も色よし人出盛り

梅いまく柳すゝし神社の風

中すゝ

待る香此早方ニ満ちり神の梅

垂き枝や初のつまかけ神の梅

笠しゝ也

香を招す花のはしめや神の梅

恵気色亀も無字阿人家さくて

八雲たつ神垣氣色花そうの

成天も花を寛しや清き鏡

誠の菅原すまのそし

花の帯取あへぬ今日此手向かな

梅

梅かたく末ゝますくまて句ひかな

春風の梅の香ちとく再路かな

新中まて梅の摩書

大山祇梅の花盛かな

花の都へ取あへぬ今日此手向かな

梅

梅か枝に来ゐるすゝめも匂ひけり

郷中まて梅の摩書す

春風の梅の香をとゝむ舟路かな

太宰府梅の花盛りよ

山姫のかさしや幾世やとの梅

湯島山天満宮遷座奉納連歌

興行 於愛国舎 梅十題之内

探題

野梅

雪のひつ咲梅白し春野の郷

日本武尊像五條立遷座奉納額

池田緑山 宅於席

兼題

神祇月

行列や王殿の上のゆふ月夜

二月十日得月楼会始

兼題

春鶯

山深し去年の雪踏む丸木橋

此方偏りん

雪消て架橋にて乱流るゝ

里村玄碩かる宿にて

風さそふ花の枝折の糸柳

竜の子の命をちらす子供かな

匂ひ来る竜や胡人の家の花

右高友　松本源太郎左衛門　行年不定

風を清く花やさそはるゝ家桜

雨風情し傷む桜の雑出　山田七五郎

許せふまるゝ

濁る日や竜あり晴しき曇

月次

青柳の下枝波打き川ぞひの秋

人の来る川や厳寒の山さくら

春の水や顔あるさまにて

柳より竜の出長き岸かな

大観寺直河合院

月次

青柳の下枝波まて川よこの秋

ん雨すぎ川や瀬ゝの山さかり

春の世や頼ある迄ちるさくら

松まんこそもの世長き蓬かな

大願寺真阿弥姥

香を紙寸路や網乃戸との梅

言の葉も縁や含む世ゝの松

言の葉は庭の世に咲く花と梅

花なりや人の別やすむ世ゝの友

方丈義右ヱ門

家の風吹き絶ぬ柳の糸

梅のり世の盛りをとらんや宿の春

時読ねし

梅の宿や匂る秋の雪の夢

惟宗白

姫松の千代ことぶきのはじめかな

新暦日

朝ゝり匂ひやさらへ竜のやと
茂喬呂為與日

並る川 陰や八ッ手柏 八ッ手勝
糸長和高独重弘

花ま心 綾ま世や深き糸の綾
糸てしめ

なひくミの風らん庭乃柳かな
やすく

千代ハ言ふそのやゝ今日の若葉時

さつや其生ぬ同乃花の宿

千句
柳

割揮や文織水の影かゝみ
岡れまて西尼涼

判
若草咲ける千代の陰みよ宿の梅

松みかん二葉ふる其の春の春

青柳や文織水の綾なみ
岡田元え尾張

柳

若みとり千代の陰みる宿の梅
松よみん二葉ふその常の春
千代の祝府や祠の宮柱
年の緒や古枝若葉の松柱
今井元敬因
時ふ今いつれ盛りや手の花
神垣の心字
よろへみん年や千歳の玉柱
永輔居士の隠
きよみん言葉の林宿の花
酒井安次言七
すむや世々安く久しき花の宿
外山ちら出日
花垣の外もときはの葉この郷

水戸當番日

若菜もおもひ々葛飾二塚かな

上水出軒日

咲残やまたとかへり松の色

泉回隆盛日

数々をくりて千年を松の春

中川故画日

千年ともまけを豊訓ん家の梅

寿治国邨得李勅を六老尼陳

高過て哀 こゝろ隆まよし

天地のし世やすみ花の宿

申秋五十の賀

新にあれ花の名ありあへ玉椿

長政寿日

咲桃の実と千代のはしめ

副元ゟ千の賀

咲年の春家めて宿の松

ゟ千一

副元六十の賀

咲年の春も数めくり宿の松

六十一

言の葉や六十程一本の花の名

笑のめくり咲や数千年の春

春もりあふ咲や数のめくり咲梅

古稀

七種は千代へ添もとしの始かな

春霞世たくひ稀なる年の春

七種や摘としの千々の春

方十歳月

千代の鶴あまる年へん玉椿

年の賀のたえんへ遠る

ありとあらゆるや千代まて宿の春

としの始あるに応律す

津ひしの若葉も千代の根さしかな

花の使ミせぬ宿や千々の春

加をるや千年ちよりの緑

若草や二葉に篭る千世の色

末久し世に二葉の松の色

花に経ん年の緑は世に栄え

咲日和れ陰や百枝のとしの色

さく年の花の姿や千代の色

其香すへ百枝満よ年の色

祈春　宗吉

若草も生ひ初し陰を年々な

同く三編鳥巣

松立つや千年の花の陰

若草

同く三編集

梅さくや千年の花の陰

若草

春の色を深めん草の二葉かな　やまとく

春月

曇りけり梅の末北春の月

惜春

惜心花まいさゝよ春乃夜

花さかし仰籠る峯の雲

夕花

花にまきて月に忘るゝこの人さかり

千句花

花盛匂ひにまかせて来てもかし

思ふ人の而枝に露よ年のも

初夜　宗寸

若草も生ひかへし塩むら年かな

桜

見る人の言葉やたゝぬ山桜

まさき花の春や更あふゝ遅桜

言の入り見へ出しハまたありしまゝて

庭の桜の盛りなる心を

あのぬしをとみるや盛の宮桜

やすなり

會頭

初もりえゝや以来く末の山

見えけや いせけとあけれなる花ならし

名残りすゝ

華麗世見えすなきとも 宮家あそ

香を待ちとも乃名残し家の風

頭よく次

目路をし山寺見ん 花の宿

初年

鶯人来る世や 二月の初祭

目路なくし峯見れハ花の雲

和年

偕人来る世や二月の神祭

和年ハ桜を画きて給ふ絵に橋

とくに色紙短冊に書よみて給ひけ

さくや此このやこの胡蝶かな

飯山前会嘉兵信世宝

折まよふ花の香に寄るや神の庭

月しろに探題

桜

山姫の花心とみえ家桜哉

帰雁

声連て霞をうつすや二渡雁

三夜り

寄西院

海神の恵しみ汲や江々の色
寿亀流

亀や千代栄ふ年波繰る岩根松
喜鶴

二葉より千代の根さしや初子栄

粧ある隣やいく世萬の宿
夜楽姓の人ゟ遠隣

末家世富の夜毎千代かけて
扇風篭

千代の香ふ所や春の柳
風升除

従蓄の年や悠しく春の色
呈比して千刑意

古根より三原ふあしの若葉
満者新宅祝八本陽子の本
梅を迴ふある三番まて

古根にも添ふあしの若葉
満香新宅 猩八中陰子の年
梅を通云ある亡きまて
霞は夜形ちや小子我の宿移旅
家の名垂まるけしく柳かな
罪もとの人催せるとて
さくらと無の西紀して竜の扇
以義長申云
四例し柳や門の道 楼南
五月への鷲寿恋る餘はまて
隠るさし柳は庭の掛しへ水く
東え喜同七附の四字
青柳の枝打ちしく宿のまゝ
方敲月

従者の尾や傍へし也諸也
足引しみ別ゑ

問ふゝやおしへ花の道しるへ

神君御やしろにて

風やぬれ代の光の恵みまさる

静かさや花に風なき宮の春

一言の賤

もとより心やすき里旅のそら

蔵ある町庭の篝子

春の色やえもいはれぬ郷の櫻

數錦のゑんよりも取見の春の色

本寺文の例　雨毋生居士

氷もとけてもとも心此日のかひ

東村　一志

海東母一周忌

思ふ世は伊勢ももてなし

満誉文一周忌

有し世の記書しとふ花の木陰に

人のいろみ

氷をも溶して心此身かな

海尿母一周忌

思ふ世に伊勢ゆる也よ然し

蒲路文一周忌

すゝ世継ましとふ花の陰ならし

人のいとなみ

もの枝や濡るゝを面影此袖の雨

人の世やおもへはあはれ去年の夏

蒲風母りし

もる風驚く夏の涼しさか

一周忌

香を墓にもる其世の面影

去年帰るや別し去年の其の雁

茶友る月

もり墓に去年や小蝶の夢の其

懐旧

香をそへて花は其世の色ならく

春水

流れ行もとゝ停よ春の水
友

夜波や山せ動の夜光根松
郭公

旅人の来て語る人ほとよまで
くしやまつて窓の灯数多の館
千句

行心のよりて来る浦は宝山の麓
東氏

流れ行高き所も流れまで
色々川水や淀れの手淀る
緑の流れ深みや高き紅葉楓

芝も千ち相見ゝやさきまでの扇
法楽

菊作り朝日やさきがけ世々の船
法楽
鶯来ても東風も番ふ柳かな 北神恵
咲けりや眺めいつまでも紀 牡丹
神やゝる先見よ祇園の世々の松
御代々世や神の恵みあさ日かげ
菊咲けば千代の田井 小
実りこそなほや玉の枝神の梅
恵みも空より天満梅の花
松青し雲も風も梅 北仮名
香をもつ星守 松乃尾の梅の花
世や麻の袂をあへる 神恵

大山祇法楽

山祇乃恵みしもしぬ新樹かな

先徳明神法楽

恵みあらハはやさきもよ本の月

月次

咲残や千代の例の石清水

中ふく

笠居まで萩きゝ麻の葉連の面

鹿の世の露さへや外の千年生

松の声流るゝや涼しき時津風

信久 和尚新解由不色より

露や色葛や情の浮くき

永楠半八十の賀

陰や年を蔵る日の園なれ

九十の賀

楠の川すゑ世の中の千年

陰やゑさる月の園みかん
九十の翁

橘うつ川すみ広世の草の中
方義年齢を申侍りて

梅や香を吹おこす家の風
昇進の人に送る

香を移す蘭や長き家の色
人並にあくに昇る雨の郷

早苗
萬てより秋の香高く早苗かな

蛍
吹かへす蛍に風のひかりかな
蓮の花
池や色玉に蓮も咲けれ

平信なりまて

なよ竹や庵にしげる世々の友

赤幹内云 鋸山を移して

宿かりや山をうつしむ若葉ゑ

新宅

住捨て千年を往く泉の軒

方義なりまて

花蔓を垂ちを鍬世の花の扇

深山に千代の声すむ泉かな

藤花をりまて

橘の香を絵ろや世々のやと

年長有吟

深山に深き心の泉の郎

如之

雪早く風もなき外への邸

長庚

松原の冬の夜清き月の宮

雲早く風も冷し外山の秋
長房

出居の夕への月清き夜哉
萬蓮

風清し蓮中水に句あらん
守之一品の隣人

到洋のはなしきめよ深き夜
永浦月

登りまて花の名聞あまたなり
中すみ

枝垂れ清水や千代の柳陰
満有送別会

名残りよ世て末枝にあまる扇かな
一子北儀

吉川にふく風も涼しき船路哉

行袖も涼しき風の来ぬ

東名日

扇もみなすゞしや心あるの一の筋

た涼月

雨ふらすハ扇も絶て手風かな

清水

老もせき老もとむる清水哉

此句老の字入りこの取ゝる

めゆるゝ老の字二つ入りてる

かさまもてるゝ此句ゆるし

成句

め時ハ老の字二つ入りても老の字を入る

よろしかる

玉の緒も結へハゆるき清水哉

泉

汲ほしも和らぐ心の白川菊

夏松

風清しことゝむ松の下涼み

人のいくみすて

玉の緒も絶へんゆくき清水哉

泉

汲ても汲ても心の白露川菊

聞松

風清しここの松の下涼み

人のいるみて

西入るや絶えて空の月

廣き月

光るなよゝ雨なれの玉蓮

井戸涌集悼す　深蓮院涌茶

日法をとめの上にて連あれ

光る露もうしや絶ええの月

百ケ月

咲も仲の霊百華咲香りや

懐旧

明みしを光の宿の露まつる

星までも光るゝ雲北まえて

楠の枝ぬれ葉茶も新緑かな

暮の月有し佐能の花まれ
　七叉十三回忌
さのみ世ハ出とかのむの菩提かな
　祖母五十回忌
別なしの花ふり葉ときさ哉
東都一の門出をきりと聞き人々ふ片参
を送りあるハ連衆よみもる枡のゝ
雨のまま与り
神ゐよる風も親しき扇かな
少年ハ風を風俗の利めけき景珠の
御仕そと送り給ふぬれ
涼しさや日ぞ涼しき下の新仕
月し旅帰そ東路人ゝ月ま多路雲と
来ん秋と振む扇丸風まかせ
帰りし延負一送ら　村川孫左衛門
　柳屋と号
扇子や打みく柳の涼
二三人の友と　蒲たんきさへ
酒あるむしろまて

居りやなし柳の下涼

主人の友に　蒲太之考

酒あるかきりまて

手代まてあつしの心泉水に

此年月朔九日居民の舞　湯沢

とる舞の追風しめる佐渡かな

佐渡

年浪や隔てて越る佐渡川

七月朔日出雲崎まで

秋風の浪をとあさむる佐渡の島

越後信濃の国まて　翁自在に

高峰山の時雨しておきて

鳴神のいて雲迯る秋の雨

高雪之に入るを見て

ふる雲の松風とし峯の月

柳瀬川に涼みける浪花　久米八

鷺すてや秋風よせし柳瀬川

初秋

葉に隔てず佗残やきのふ今日の秋

七月一日口吟

男子の川秋も一気を好むかな

七夕

浪よその中さゝなみや星も逢瀬

あはれなや星の契も世々の秋　やまと

織姫もうつや梶の橋造り

色紙や織り初めし糸の幃

月影もまちや星まつ夜の空

水まさりぬ雲瀬やこゝも天の川

雨や橋渡りの織かける天の川

梭織やうち逢ひまあへ七車

[illegible]

雨や稲妻の織まする天の川

機織やいと安くもあへ七車

水まもぬ絲や細き天の川

掛りて勢波の浮稲あみ此川

うちいてゝこそや天川星を祭

焚きや一夜を千代の天川星

文月十日あまり少年車を出立
尾川の庵へ立寄柳が明なへ
おくられ　後朝亜寿

ある秋は又此川のゝ月の友

月ハ九月五日亥南村院花岩寺にて

傾きかる月や昇らぬ十寸鏡

陸徳つゝるて

ありしよはひぬ月此ねその柳の谷

色紙や掛紙の糸

日そよもや星のかさね会

水まもぬ全影やさゝ白天の川

日志隠しけるに序して

さらぬ人の心やあはれし　梅将

並ぶの秋や今ぞ一入れ　和勝

留別雨ふりまさりて

見送るや酒の名残れ　秋の月

立帰り見よかしはまさる酒の月

隠にて　泉桜山

めくりきて見ん無や桜むし法の月

貴き金龍ををみて

龍耳桜内見晴雨やらす　秋の雲

祇公忌日

世こふるや松の音秋風道乃名

秋や去ぬ師し文月兆飢の名

東都正燈寺の紅葉見るにいさなは

清らかりし　東さま書の猪ゆえもけれ

盛りなれ行野鳥毛見ん比能

世こゝろや松の言葉道乃庵

秋や筆ゝ師し文月れ乳のあ

東都正燈寺の紅葉見にまかりけるに

法のみち未た青き紅葉も有けるに秋れ

盛りすきす不行者元より飛錦

萩原や是い桜の名ちらさへ

法楽

紅葉する陰を法の道や神の森

神のませる陰や千秋の庭紅葉

裁縫つよ袖のまゝ神の庭風

梅の香や朱れ丹垣の村絶

椛せし桜や丹垣の唐錦

白山大権現法楽

水のかけ清やすむ鏡清き秋の月

白露にや木々も染わた秋の山

月

月ハ秋のみなりけり四方の夜
千句了

山や月露吹払ふ嵐の中
松門八景洞幽秋月

山照す影や幾世の秋の月
十五夜

月や船名ハ雲ある何処の海

傾く人出待てまやよ今日の月
高津九毛ハ

高根にハ久しき雲や根元の月

月今宵晴るゝも高き清きの谷
声の雲ハ高尾清らくやゝく
見利まゝ小月もえ今毛ハ

村雲や風の夜ふく今日の月
小林津にて

濱津や波の平し九海の月

村雲や風のたえ間の今日の月

小林津まて

濵津や波の手より九海の月

東郷まて

むさし野や入方きえぬ今日の月

新今宵晴るゝ月移すゝ田川

十三夜

名をなくしすゝむや楮の秋の月

月

雲掃へ秋の二柱の今日の月

一秋ハ少林
一秋ハ寿応

癸あやや二てひえ霧る元の月

長月の月をゑ折む今宵との雨

あいふ文あるまゝや照す秋の月

新窓 旅山のさとにて書

月今宵晴るゝも曇る北清の谷

雲の雲ハ霧るぬ渡しやすく

至れますハ月かる人今宵ハ

二つひは山に霧て今日の月

中より

東紅て

西より雲に障りて

晴る夜は

雲晴し晴よ雨より後の月

月次

晴る夜の月をむつ錦の縁かな

来のけてみるや光の葉かな

下深る松の色ある小草ての露

色外よりさまきは梅の根てる

下なるの松は重ねて家世界の圖

方義ありて

松虫の千代を繕ふ声まての那

好て得きる云り

色紹ね松をと言祭の林の秋

義草昇を

色は世り人をて秀の盛

方義南吟

廿闌

二義楽拝呈

色かへぬ今そ秀栄に　艸蘭

方義斎吟

池水の深きや心月此友

満香作りて

川そよる陰や檀乃初梔

とくらしめる

平借新完

移し植て倶陰家無し楽の庭

信美月しるし

経の入てよろかや千秋宿の月

右方吟

百香の帰華恒宮さ分つ秋

ゆすくれ

浪山新窓

梔そや初もつ色とれ秋の山

方丈殿新に家造せらる

根ちかき川草の露や岩の秋　雅園貝次

深分て行や時雨のむしも枕　初ものとして

色々に香をこそ粧の中秋草の露　草来

露白し星の今宵の百日草　平陽　小比叡山

末ことし咲けの露　草来　秋の露
草木の画ある竹まくらに何露を
ありけれハ

花の露流れて露無草木の剛　月露

深淵人鳥心あり　むしの露

深き文時雨て露の木の花

枕元の楓さつ由　秋の水

深き又時雨て見ぬのあさきかな
艶なるの楓まつの曲　秋の水
私案ふゆくて風なき深山かな
あらまほしくてみへす
よろしき
濁て月寸日影や高き北村艶
正木　年賀の人送家
来歳は正木の虔て庭の雲
大原景武母公の例
西山や山の影や花へ虎の月
御たる母の例
雨みる月も時雨北りへ
武井周芳父の撫七回忌
とりの月みる世や恨秋の色

懐旧

菊井とある幕に袖のぬれの月　蔵景

赤坂にてちなみて

来このふのちりを文へぬ山の秋　風

風ふきしや浪よする松の声　雲

雲深く松風かよふ園への邸

さまりみん雲をとおる砂利松　冬月

影寒し落葉に残る岸の月　雲英

風寒くさをとこえし松の声　清泉

行く割の雲中や澄る松の月

神や東寺風に静まる雲の松

世やゆふあけの井垣の松の声

風さそふさえも見えし松の色
雲英
法楽
行列の来る遠や澄る松の月

神や古寺風静まる雪の松
春やしあけの井垣の松の色
神垣と匂ふや梅の冬籠り
御手洗の水と縁や朝氷
氷
露も手向社の神垣にて奉る哉
神垣と匂ひ見えしの松の雪
東照大権現御法楽
月雪花めくりて偲ぶ宮所
月次
浅月の本社に隠ぬ萩の露けく
神前の月さへの色の小春の郷
初霜と見るや外山のにしきの色
雪ならで花や春待宿の梅

雪

雪の野をたどりぬる山かげの新路かな

降雪にあらしも白妙の網かな

羅をも其の人に逢ふか

松一本雪にうもるゝ木のえんにか

松の緑

夜経(?)庭(?)花(?)…世かな

松の緑

宿の庭

松の緑

松枝や千代の緑は雪の庭

経緯(?)や千代の春あるとしの松

庭の雪色 小春の山花 緑のか

風…松乃…の

庭の景色小春の山花縁のか
先信散方催しある席にて

風白し我終松乃分給の事
蒲夫吾こうく

風や月水の山峯も見松の音
汝兄こうく

言の葉の花の梢影に雪の松
蒲径こうく

山の峯雪や飛をす影の松
蒲径主催西堂に吟

文車やめくりてこゑん雪の友
左吟

別なれし浪や心の友千鳥
永川一ろの勝

行衛や雪とみやこの旅衣

住鶴や千代の声あるまゝの松
蒲呂催清洲にて
千借こうして

人のいみ

本の[illegible]をとえハ色[illegible]花[illegible]
母の七回忌

間部のみのはげしき花桔梗かな
三十三回忌

めぐる世ハ変のはなおの時鳥
祖父の五十回忌

梅が香の[illegible]世[illegible]昔の秋
懐旧

雪なき[illegible]世の寒さかな
神楽

星祭声たかく[illegible]宮に拍手
年内立春

来る年や年の内より花[illegible]
やすく作

歳暮

織姫のあやなく年や[illegible]
[illegible]

星▢▢声た▢▢▢宮に於て

年内立春

来ぬや年の内とし花の春

やすく

歳暮

織姫のあやなく年や重なれり

芦筥の一よ代年の備への面

春待て庚の東を年の寒咲かな

行年を雪まとひける寝覚かな

御しめ只手並と一夜の内年か

ゆくとしの寝や一夜の中宿

年波や踏まゆくも末の松

伴ふもの惜むも年の一夜哉

あらくなす綾を惜みる今宵哉

芦垣のひくくとゝめよ年の寝

毛を焼き雪を惜こしかな

今年ハつより九月和ゟて侍りける
御みのか九月雪降出捧まつり共
やゝ次

積りすハ雪も惜む年　の暮
やすしけ

川とめよ惜むとしもとめ川の号

一年を寒に落てそれ　暦への部

雪もとも惜むハ年の木末哉

老の波寄るや年も未の松

一年ハめぐる氷河清水

経るたて年のあるは巻思はれし

推遷る年床の氣の宮を成し

為とし　の巻

却眺只目遊よる年の暮

白く飛雁の雲羽吹　山

峯向く花の眺めて胡桃け

竹つしのゝ

句としのくれ
押只目渡る此年の暮

戻る飛雁の雲羽吹　山
峯白く花咲けり羽ほけ
笑しの句
宮の母ゝまし人や作らん
初花を守て行ありて
人の情も気をもやしぬ
松方の残さ一本此花咲る
別まてと情もハ其ゑハ御ぬし
惜只も近り此春されぬ
あかり春院の海かりて
侭長の椎もの春おもとよ泪
この神館のすゝき思ひ出
借宿にて
其跡ゑる蘆乃法師
舊跡き　門田の柳　枝垂て

何の難波のうらみ強ん
集筆を流す床按の文ゑる
彩の絵は雲書手那し
秋来ぬと志る風の涼しさを
やすし
深の香をさそふ秋風
家見へてむしく燈籠の村もと
紫の瓶に夜半深かして
萩咲の中よりと出し袖
やすし
吉もいく只田車かなし
古よりの庭は雑草の萩の風
幽雲
年を居てや人の帰る
取射山祭こもりかなしな

秋
石ふ筆おし窓の虫
秋は名のこゑきくほとゝぎす
夜寒の宿をえ出るまゝ夜

内射山祭つりかしな
年を在てや人の帰るらん
出雲らん

秋
石ころ車おりす露の世
秋は名のこゑきくほとゝきん
仮寐の宿を立出る夜
初雁も月し旅するや気るらん
やまとむろん
夕暮涼し　稲荷山
鳩くらき軍も音するやみめるらん
一句の理よろしやすらん
あそそ帰る袖の露けき
白士と文ともしよもなく袋くさ
袋姆の枕〻猿哉我眼
掃りぬ春や　山とおもふらん
宇治川不縁もありや前園川
あそてよき川乳の山の名もなし
夕交はのまゝ別まゝ果まよし

おそりけ春計りみつるかな

まろめぬ人ハ一東あ解て

未句にはまりつゝかな

ものりはそ牙をいやまのきり

集中の難やゝと只服生て

笠しるし

牙ゝけし天の出姫も見て

花ぬるもよしや服を結し

良辰たえし 笠

算少しよて送らん名のしき

かゝ雨月の厭ひ也ぞ者の智りけり

復秘の一度乃終り出雲つ

むかしくこの月手枕の夏

笠しるし

まづこみしを思ひの姫君て

芳ゝり羽をかへず惜しき

よしはし

晴月待ゝ五月雨のころ

星晴き夜半の無錫ゝのみのん

やすし

わすれもこのはに思ひ

宜しく侍ん
まつしみを思ひの姥すて
蕣より羽をかへす蝶しらさ
よろし侍ん

暁待て 十月夜のそら
星聴き杜宇の声路いつらん
中よく候
あるとも何ぬ思ひ出さるゝ人
恋になき三路形見一筆より
中よ小僧の名そ よろ 候
皆人のねふりを覚ます陸風そ
筆の先をこのむ哉
年月の恵や身もくちるらん
名をまきや枕とる月の頼みし
雲居なかなかゝも逢ふ 青楽
よろし候
瀧川の流る末のあとなし
鷦鷯雛を飛しまゆり見ぬき
飛の御所何候
偖もなる心の内能ぬ一打

商人とかける宿世の軒に哉
えのひすゝみたらん御敵
清書かうて日録も清て晴き盛
やすみ
はるゝたとる東路の末
法花の花さんとも浮みたらん
継母より川姫え芦原草
新橋を渡ふ蜘蛛乃糸
今朝別る月雪の色
ふある梅り山を出てみん
焼塩の烟ハ風乃東漕て
んをも月にもきせ雲有
君よりあめ世をおもへ優さ
国を治めし人こそ貴き
草薙の釼ハ世々に稀寶ます

松島や雄嶋ハ今日ハ事まで
あへハ菓子の根こ樹よん

あくハ萬事の根となれ

松島や雄嶋ハ今日ハ寄持て
よろしき

玉をみかゝる宝こゝろしも

君よよき政事を國も何ぞ安泰

二字ハ拝りやすき体て
物をよく治り潤ひ

唐ハこのよくつる大和　もろこし

道ハこうよくつよれやはらか唐土

以川くまのあるハ鬼住むらん

楠陳の東北ハ万里よりも遠るな

子ハ母の乳房をしたひ取り母

松竹ハてハなと祝り行らん

揚織し　なりと思へハ大きなる世

西田くん

一　御手に只おのれか身をそくさき
障子かくし壁の折縄綴もし
杉とのゝ四本し尾の先よりて
世を捨人の住詠　風雅
ゆすら
別まつる友の上のゝ暮まて
あかりし旅の尾をそゝ詠まぬ
ゆすら
まよふ心ハ何のはかられん
ますら人只思ての道とし　文の道
皇し九めて
人の親とも従きぬ非
流くとも敬よあまて　和哥
ゆすら
只文りハ　友まちろあま

孝の道従への尾も正しくて
ゆすら
猿おいのみけまへ細き蝶

深くも敬よあまて　和寄
やすくば
只文りハ友まちろ趣

孝の道仕への作も正しくて
やすくば
猿猴のけさ網干螳火
汲て知る清の流れ末の世弟
望しくば
命より只とあん呑喘ぬん
深く心を筆すらう川世家

日生盤堂
政常

春百九十五句　夏七十一句
秋八十五句　冬六十句
附句五十二句
惣計四百六十三句

墨点
朱点
青点
黄点
萌黄点

法橋素川
法橋昌成
玄碩
法眼昌逸
章甫